

# 表現と時代構造

— 映画「エイリアン」の構成素分析 —

愛知大学教養部

竹中克英

07. 14. 21. December 1994

## Abstract

この講義は、映画「エイリアン」の全体的な意味をどのようにして合理的に把握するかについて、その分析方法と具体的な操作を明らかにする。あとで説明するように、人間の産出行為の所産（広義の意味でのあらゆる人間の活動）の意味を把握する方法として、1963年以来ヴァルター・ファルク (Walter Falk) が展開してきた方法「構成素分析」(Komponentenanalyse) は、主として文学作品の分析のための方法として用いられてきた。しかし、これは基本的にはあらゆる人間的所産の分析に応用可能であることがこれまでにすでに証明されている。

映画「エイリアン」は1979年にその第一作が発表され、その後のSF映画に大きな影響を及ぼした。この作品が全体としてどのような時代的意味を表現しようとしているのかを明らかにすることが、この講義の目的である。さらに、ファルクが展開してきた「潜在的歴史理論」についても時間の許す限り触れることにする。

## 目次

<b>1</b>	<b>第一時限：構成素分析概論</b>	<b>3</b>
1.1	構成素分析論	3
1.1.1	授業目的	3
1.1.2	ヴァルター・ファルク	3
1.1.3	構成素分析	3
1.1.4	実例: »Sigi oder die heilige Nacht«	4
1.1.5	実例: 練習問題	6
1.2	映画「エイリアン」鑑賞	7
1.2.1	授業目的	7
1.2.2	「エイリアン」概要	7
1.2.3	構成素分析のための準備	7
<b>2</b>	<b>第二時限：映画鑑賞と構成素分析の操作</b>	<b>8</b>
2.1	映画「エイリアン」鑑賞	8
2.2	構成素仮説の検証・修正	9
2.2.1	授業目的	9
2.2.2	課題	9
<b>3</b>	<b>第三時限：潜在的歴史理論概論</b>	<b>9</b>
3.1	時代と時代構造	9
3.1.1	授業目的	9
3.1.2	時代の構造	9
3.1.3	時代の集団性と産出行為の個別性	10
3.2	小説「鳩」と物語「変身」の時代構造	11
3.2.1	授業目的	11
3.2.2	小説「鳩」の構造	11
3.2.3	物語「変身」の構造	11
3.3	潜在的歴史	12
3.3.1	ヨーロッパ潜在的歴史における「紀」	12
3.3.2	創造主義期および永遠主義期の「段階」	12
3.3.3	集団主義紀第一代の期	12

3.3.4	集団主義紀第一代各期の段階	13
3.3.5	永遠主義中間期	13
3.4	学年末試験課題	13
4	実践：映画「エイリアン」構成素分析	14
4.1	内容要約	14
4.2	構成素分析—仮説定立と意味複合体—	14
4.3	構成素構造式の定立	17

## 1 第一時限：構成素分析概論

### 1.1 構成素分析論

#### 1.1.1 授業目的

ヴァルター・ファルクと構成分析について、簡単な説明をする。映画「エイリアン」による具体的な分析方法については、第2時限目に行う。

#### 1.1.2 ヴァルター・ファルク

ヴァルター・ファルク(1924-)はマールブルク大学(ドイツ)近代ドイツ文学教授。1963年以来、文学作品の新しい分析方法である「構成素分析」を展開し、数多くの著書、論文を発表している。その代表的なものは、「苦悩と変身」(Leid und Verwandlung)、「文学の構成素分析」(Handbuch zur literarwissenschaftlichen Komponentenanalyse)、「歴史における秩序」(Die Ordnung in der Geschichte)、「近代の終焉 — フランツ・カフカと表現主義者たち」(Franz Kafka und die Expressionisten im Ende der Neuzeit)などである。

構成素分析は文学作品の全体的意味を合理的に把握するための実験的方法である。従来文学作品の理解、その全体的意味の把握はきわめて主観的な方法でしかなし得ないものと考えられてきた。ファルクはこの全体的意味(「意味総体」)を人間の産出行為(「表現行為」)の基本的な理解に基づいて、いかにして合理的に、つまり科学的に把握するかをその数多くの著書で取り組み、今世紀ドイツ最大の哲学者マルティン・ハイデガーの哲学を批判的に発展させ、今日の構成素分析法を厳密な学問的方法として確立してきた。

#### 1.1.3 構成素分析

人間の産出行為は意味の表現行為である。従って、その所産は全体としてひとつの統一的な「意味」を内包している。所産が全体として表現しようとする「意味」のことを構成素分析においては「意味総体」と呼ぶ。

また、ひとつの統一的な意味を表現する「所産」を「テキスト」と呼ぶことができる。文学作品だけでなく、映画、絵画、舞踊などの芸術的テキストのほかに、われわれは多種多様なテキストを見出す。

テキストはそれを構成する要素との関係から三つのレベル(層)に分けられる。すなわち、レベルI「要素レベル」、レベルII「要素関係レベル」、レベルIII「意味総体レベル」である。

意味総体はそれ自体が三つの構成素から形成されて、ひとつの統一的な全体をなしている。それぞれの構成素は「現実構成素」(AK: Aktualkomponente)、「潜在構成素」(PK: Potentialkomponente)および「結果構成素」(RK: Resultativkomponente)である。

現実構成素は、表現行為(産出行為)の時に表現者が置かれていた現実成分であり、これはひとつの完結したシステムである。従って、このシステムを変革しようとする新しい運動に対して敵対し、この運動の実現を阻害しようとする力として作用する。

潜在構成素は、表現者が表現行為を通して生み出そうとした可能的意味であり、現実構成素と対立し、これを変革することによって、自分が目指した可能的意味を実現しようとする力として作用する。

結果構成素は、潜在構成素との革新的力(刷新力)と現実構成素の自己安定的力(敵対力)との対決の結果実現された新たな意味である。これは潜在構成素の「可能的意味」の現実体であるということができる。

意味総体は、これら三つの構成素の運動として表現される。

#### 1.1.4 事例: »Sigi oder die heilige Nacht«

以下に示すテキストは1985年に書かれた短編である。このテキストを読んで、あとの問に答えなさい。

Sigi war wieder mal allein. Seine Eltern waren zu Bekannten gefahren, wie so oft. Sigi konnte nicht schlafen und seine dünne, hagere Gestalt, für 12 Jahre viel zu klein, durchstöberte leise die dunkle Wohnung. Er durfte kein Licht machen, denn sonst würde sofort das Kindermädchen herüber aus dem Anbau kommen. Er ging in die Küche, um Schokolade zu suchen, doch Mutter hatte anscheinend wieder vergessen einzukaufen. Er schloß die Tür wieder vorsichtig und ging vom Flur her ins Wohnzimmer. Dort war es etwas heller, weil Straßenbeleuchtung ins

Zimmer fiel. Auf dem Tisch vor der Fenster lag Mutters Brille. Vater hatte sie ihr vom Kopf geschlagen.

Sigi mochte dieses große Zimmer nicht mit seinen Ecken und Winkeln. Überall könnte sich hier ein Geist oder ein Räuber versteckt halten. Er verließ es schnell wieder und flüchtete über die Treppe zurück in sein Zimmer. Er verschloß die Tür.

Nun war er sicher. Mochten sich die Einbrecher unten in der Wohnung selbst verhaufen, er war gerettet und die Tür zu. Langsam stieg er wieder in sein Bett. Er sah seinen Teddybären, der ihn mit riesig, dunkel glühenden Augen anstarrte. Sigi wandte sich ab und sah zum Fenster. Wie gerne wollte er, daß es endlich hell würde.

Plötzlich sah er sie. Es waren zwei. Er versuchte zu schreien. Halt! Nicht. Bleib weg, warum wollt ihr mich töten? Bitte nicht! Er wollte es schreien, doch er brachte keinen Ton heraus. Er lag steif in seinem Bett vor Angst und Kälte.

Das Auto mit seinen Scheinwerfern unten auf der Straße bog in eine andere Straße ein und in seinem Zimmer war es wieder dunkel. Es dauerte lange bis Sigi das verdaut hatte. Er konnte jetzt nicht mehr im Bett liegen, er stand auf und ging ans Fenster.

Als er einen Weile rausgeschaut hatte, entdeckte er auf seiner Fensterbank einen großen weißen Vogel. Zuerst bekam er Angst, doch dann erinnerte er sich an sein Märchenbuch, in dem er dieses Tier gesehen hatte. Es war eine weiße Taube. Langsam verlor er die Angst.

Die Taube gurrte vor sich hin und Sigi begann mit ihr zu reden. Er redete viel und lang, als es ihm plötzlich vorkam, als antwortete die Taube. Kommt mit mir, schien sie zu sagen, komm! Wohin, dachte Sigi. Komm, laß uns den Regenbogen besuchen. Vertrau mir, komm! Sigi zögerte. Doch dann sah

er die weiße Taube und nahm sie ganz fest in seine Arme. Er hielt die ganz fest. Und sie flogen, fliegen hinein; hinein in ein Gefühl der Wärme. Sigi sieht Farben, die so schön sind, daß er sie nicht beschreiben kann. Er kann das Glück nicht fassen, das ihn durchrieselt. Er riecht nach Liebe und die Luft, die er atmet, schmeckt nach Güte. Er preßt die Taube fester an seinen Körper und fliegt, fliegt immer weiter.

Die Menge drängte sich um den toten Jungen, der dort reglos auf dem Bordstein lag. Man wollte die Eltern verständigen, doch niemand kannte ihn.

#### 1.1.5 実例：練習問題

- 主人公の状況を叙述している箇所を選び、その内容を列挙しなさい。
- 主人公の父親と母親の関係は現在どのような状況にあるか。
- それは物語のどの部分から証明できるか。
- 上で列挙した主人公の状況を1行で要約しなさい。
- 主人公の空想部分を叙述している箇所を選び、その内容を列挙しなさい。
- 上の空想部分は主人公のどのような意志を表現しているか。
- 主人公の空想を産み出すに至った最大要因は何か。
- 彼はこの空想によって何を求めたのか。
- それは物語のどの部分に最も良く表現されているか。
- 主人公の意志は彼の置かれている状況に対してどのような関係があるか。
- 主人公の死は彼にとってどのような意味を持っていると思うか。
- この死によって、主人公は空想によって求めたものは達成されたか。
- 状況部分と空想部分とで、意味の上で対立する語句をすべて列挙しなさい。

- 以上の解答を踏まえて、この物語の内容を簡潔に要約しなさい。
- この物語は「幸福」というテーマで書かれたものである。主人公は自らの「幸福」をどのような形で達成することが出来たか。

## 1.2 映画「エイリアン」鑑賞

### 1.2.1 授業目的

映画鑑賞は、ただ漫然と画面を見るのではなく、全体的な内容を原稿用紙1枚程度に要約できるように、注意深く鑑賞すること。

### 1.2.2 「エイリアン」概要

製作 1979年

制作 Gordon Carroll, David Giler

監督 Ridley Scott

出演 Sigourney Weaver

美術 H. G. Giger

それぞれの登場人物の役割、それが物語の中で果たす機能などをメモしておく。登場人物は7名、すなわちランバート(女)・リプリー(主役)・ケイン(男)・ダラス(船長)・アッシュ(男・科学部長)・パーカー(男・黒人)・ブレット(男)である。

### 1.2.3 構成素分析のための準備

映画「エイリアン」の構成素分析、すなわちその意味総体を把握するための準備として、映画鑑賞の際につねに次の課題を忘れないこと。

- 内容要約
- 作品の内容を原稿用紙1枚程度に要約する。この場合に、特に作品において対立するふたつの勢力(力・傾向)とそのふたつの勢力の対決の結果に注目する。勢力Aおよび勢力Bはどのような傾向を備え、どのように対立し、その結果がどうなったかを、内容要約で記述する。
  - この課題のために、鑑賞中に内容的に注意すべき点をメモする。理解の困難な部分は、メモに印を付ける。



- メモに従って、内容要約を行う。
- 物語の現在時点での経過に対して、過去（回想）部分にあたる内容（これを「前話」(Vorgeschichte)という。これに対して現在時点での物語の経過を現す部分を「主話」(Hauptgeschichte)という。)を区別して取り出し、簡潔に記す。

構成素仮説

- 内容要約にもとづいて、対立するふたつの勢力の傾向とその対立の結果を箇条書きにし、それぞれI、II、IIIの番号をつけた下のようなリストを作成する。またI、II、IIIのいずれにも分類できない項目は、Yの記号のリストに記入する。理解の困難な問題には、Xの記号のリストを作成する。

- 上の課題を次のような表を作って行う。

I: (勢力A)	II: (勢力B)	III: (結果)	Y: (分類不能)	X: (理解不能)

## 2 第二時限：映画鑑賞と構成素分析の操作

### 2.1 映画「エイリアン」鑑賞

ここでは次の作業を行う。

- 内容要約の作成: 映画鑑賞終了後、全体的内容を要約する。
- 構成素仮説の定立: 疑問点などについて検討し、第一時限の課題リストを作成する。
- 意味複合体の記入: 課題リスト（これを「構成素表題」とよぶ）に基づき、それぞれの表題で表わされた内容を具体的に表現している作品部分を、表題の下に箇条書き（これを「意味複合体」と呼ぶ）にする。  
意味複合体は、作品の全てを網羅する必要はないが、少なくとも表題にとって基本的だと思われるものについてはリストに記入しなければならない。

- リストYの記入: 構成素表題に分類できない意味複合体はリストYに記入する。

## 2.2 構成素仮説の検証・修正

### 2.2.1 授業目的

内容要約 (Gehaltsynthese) および構成素仮説 (Komponentenhypothese) に基づいて、構成素分析の第二段階の作業に入る。すなわち、それぞれの構成素表題 (I、II、III) の検証を行う。

### 2.2.2 課題

- 意味複合体の検討: 仮説の検証は、リストYに記入された項目について行う。リストYの記入項目がなければ、重要な意味複合体がまだ残っていないかを検討する。
- 構成素表題の修正: それぞれのリストに記入された意味複合体の全体的な内容を構成素表題が的確に表現しているかどうかを調べる。もし不適切な場合には、表題を改める。

## 3 第三時限：潜在的歴史理論概論

### 3.1 時代と時代構造

#### 3.1.1 授業目的

時代と時代構造の概念について述べ、映画「エイリアン」の時代構造について考える。

構成素分析理論の「時代」概念について、ヴァルター・ファルクによって説明を行う。この場合に、もし時間的余裕があれば、彼の「潜在的歴史理論」(Die Theorie der Potentialgeschichte) について触れることにする。

#### 3.1.2 時代の構造

人間を他の動物から区別する本質的能力は、時間的な連続体としての歴史において、単なる生物学的な進化ではなく、質的な変化を成し遂げてきた

点にある。「時代」(Epoche)の概念は、従って、自己を他から質的に明確に区別するところの一定の構造を備えた時間単位として規定される。だが、時代をこのようなひとつの構造的統一体として規定する場合に、この統一体を生み出す力はどこに存するのかという問題が生ずる。時代は、単に限られた人間の生活領域においてではなく、生活領域全般にわたってその活動を規定する同質の構造を持った時間単位として定義されなければならない。しかも、ある時代はそれに続く時代と構造的に異質なものとして自己を区別するものでなければならないと同時に、自らとは構造的に異質な次の時代を生み出す力を自己自身の内に持たなければならない。なぜなら、時代は人間の集団的な産出行為の結果であり、自然発生的に生成されるものではないからである。時代を創出するこのような力は、従って、いま現にある時代的条件下では自己自身を実現することのできない力であり、自らが置かれている時代的制約を越えて自己を実現し、そのことによって同時に新しい時代を準備する力だと言える。

時代の創出をいま人間の「集団的」な産出行為の結果と考えるならば、この行為には基本的に対立するふたつの力が働いていることになる。すなわち、すでに実現されたものとしての現にある時代を維持するために、この構造に質的な変化をもたらそうとする力に敵対する自己安定化的な力と、まだ可能性としてしか自己の存在を主張することができず、自己を実現するためにはそれを妨げる現実的な力と対立し、新しい時代を生み出さなければならない刷新的な力である。従って、時代はこのふたつの力の対立関係の結果として産出される。<sup>1</sup>

### 3.1.3 時代の集団性と産出行為の個別性

時代は上に述べたように人間の集団的な産出行為の結果と考えることができる。だが、人間は自覚的な集団行為として時代を生み出すわけではない<sup>2</sup>。

<sup>1</sup>時代の質的な構造変化は、後にもるように、構成素分析的には現実構成素と結果構成素との優位性転換として確認される。我々は、ここでは付言する余裕はないが、時代内変化、すなわち時代構造に上で述べたような質的な変化をもたらさない変化に対しても注意を払わなければならない。構成素分析的には、「段階」(Phase)としてこの変化を実験的に確認することができる。

<sup>2</sup>もちろん例えば革命運動における自覚的な集団性を、我々はここでの異論の根拠とすることもできる。だが、時代を人間の精神的、経験的を問わず、生活領域全般を構造的に規定するものとして捉えるとき、このような集団性は我々が時代産出行為について考えている集団性とはレベルを異にする。ここで論ずる余裕はないが、このような集団性の問題は後に扱う優位性との関係で考えられるべき課題である。

とすれば、それが自覚的であるか、あるいは無自覚的であるかの区別に関わらず、時代は個々の人間的行為の総体として産出されることになる。あるいは、個々の人間の産出行為の総体として現れる異質な時間的構造体が我々がここでいうところの時代である。もちろん、人間の個別的な行為のすべてが時代を産出するわけではない。個別的行為は、時代構造の枠内で実現されるものこの枠を越え出るものとに区別される。時代被制約的な行為は、集団的にも個別的にも新たな時代を産出する力とはなり得ない。だとすれば、いま新たな時代を生み出す行為として問題となるのは、人間の個別的行為の内でもっばら時代超越的なものである。

## 3.2 小説「鳩」と物語「変身」の時代構造

### 3.2.1 授業目的

ドイツの作家パトリック・ズースキントの小説『鳩』およびフランツ・カフカの物語『変身』の時代構造について考え、映画「エイリアン」と比較する。これらふたつの作品は、映画「エイリアン」と内容的にきわめて類似している。前者は1986年に、後者は1914年に書かれた文学作品である。

### 3.2.2 小説「鳩」の構造

内容要約: 小さなアパートでささやかな自分だけの生活を築き上げてきた主人公ヨナタン・ノエルは、ある朝自分の部屋の前の廊下に巨大な鳩がいるのに気づく。点々と廊下に広がる鳩の汚物を見て、彼は自分のこれまでの生活が無残にも崩壊していくのを自覚する。冷静さを失ったヨナタンは、会社で失策を犯し、アパートの部屋に帰ることもできず、その晩安ホテルに泊まる。ホテルの一室で夜を迎えたヨナタンを嵐が襲う。彼は、この嵐の猛威を世界の終末と感じ、自殺を遂げようとする。翌朝、嵐は去り、全てはまた平静を取り戻す。

### 3.2.3 物語「変身」の構造

内容要約: 主人公グレゴール・ザムザはある朝巨大な昆虫に変身していた。彼は自分の身体の異変を否定しようと、これまでの生活を維持することに努める。しかし、彼がこれまでその生活を支えてきた家族のもの、とりわけ彼

が愛していた妹に毒虫といっしょに生活していくことなどできないと宣告され、惨めな死を遂げる。家族は、変身したザムザから解放され、新しい生活を目指す。

### 3.3 潜在的歴史

今世紀の潜在的歴史については、次のような時代がヴァルター・ファルクによって仮説的に提案されている。

#### 3.3.1 ヨーロッパ潜在的歴史における「紀」

秩序主義紀 800	自我主義紀 1450	集団主義紀 1920
AP A: 主観的、規範的世界秩序  P: 世界秩序と対決する主観的能力  R: 主観による世界秩序の補完	PP P: 主観的創造力  A: 三次元的物事空間  R: 主観に基づく物事秩序	AP (A: 世界の客観的かつ空虚な構造の理解?) (P: 構造を発見し、具体化する主観的能力?) (R: 主観による世界構造の充足化?)

#### 3.3.2 創造主義期および永遠主義期の「段階」

創造主義期 PP / K-期 1880			永遠主義期 優位性転換/中間期 1910		
徴表主義 段階 M-段階 1882以降	幻想主義 段階 V-段階 1893以降	変容主義 段階 K-段階 1900以降	破壊主義 段階 M-段階 1910以降	救済主義 段階 V-段階 1911以降	不条理主義 段階 K-段階 1914以降

#### 3.3.3 集団主義紀第一代の期

集団主義第一代 AP / M-代 1920		
空間主義期 AP / M-期 1920	時間主義期 PP / V-期 1950	第3期 AP / K-期 1980

### 3.3.4 集団主義紀第一代各期の段階

空間主義期 AP			時間主義期 PP			新しい期 AP
M-段階	V-段階	K-段階	M-段階	V-段階	K-段階	M-段階
D:1920-	D:1931-	D:1942-	D:1950-	D:1958-	D:1969-	D:1978-
Ä:1926-	Ä:1933-	Ä:1945-	Ä:1958-	Ä:1964-	Ä:1971-	Ä:1979-

### 3.3.5 永遠主義中間期

ヴァルター・ファルクによれば、永遠主義中間期の時代構造は次のように要約することができる。

この大転換は、自我主義紀の意味連関がおそらくは完全に否定されてしまうような人間的状況の経験によって始まった。たとえばカフカの長編小説『審判』(Der Prozeß)に見られるように、自我が制御不能な悪魔的な力 — この力は自我の破壊を目指した — に従属していることが明らかにされた。だが詳細な研究によって、この破壊力が自我の活動と完全に結びついていることがわかった。この破壊力はかつて(潜在的には創造主義期に)自我自身が求めたものにほかならない。人間的自我の状況は、大転換経験の初期の段階では狂人の状況に似ていた。狂人は最初は自分から望んで狂気の爆発に力を貸すが、そのために抑制できなくなった自分の魂の力に捉えられ、自分自身の欲求の力に苦しむことになる。関係テキストではしかし、超人的な力は本来的には自我の欲求によって創造されたというよりはただ解き放たれたに過ぎず、従って、それは自我の時間的活動に先立つ永遠の素質に属することがしばしば明かになる。このような「永遠」の力との葛藤が問題とされた時代を永遠主義という概念で表わすことができる。

## 3.4 学年末試験課題

以上の講義を踏まえて、映画「エイリアン」Part 2およびPart 3の構成素分析を行う。これは学年末試験の課題でもある。学年末試験は、「構成素分析」のいくつかの概念について説明を求める問題と「エイリアン」(2 or 3)の構成素分析を実践する課題とからなる。

## 4 実践：映画「エイリアン」構成素分析

### 4.1 内容要約

この映画は前話と主話を備えているテキストであることに注意しなければならない。

- 前話

前話の内容を形成するのは次のような意味複合体である。

- エイリアンの侵入と異星人の滅亡
- 異星人からの警告信号（リプリーが解読）
- アッシュの特別指令 937

この特別指令の内容は、貨物輸送船ノストロモの航路変更し、エイリアンの捕獲を乗員の生命に優先する、というもの。

- エイリアンについてのアッシュの情報

エイリアンは良心・後悔心を持たない完全にして純粋な生物である。

前話の全体はアッシュの行動に引き継がれていく。従って、アッシュに代表される構成素Iが推進力 (Impuls) を持つ。

- 主話

特別指令を受けたアッシュは船内にエイリアンを入れ、地球に持ち帰ろうとする。航行の安全規則を遵守しようとするリプリーに対して、アッシュはあくまで会社の命令に従おうとするロボットである。エイリアンとの壮烈な戦いが起こり、アッシュを初めとする乗組員は滅び、ひとりリプリーのみが生き残るが、地球への生還の可能性は少ない。

### 4.2 構成素分析—仮説定立と意味複合体—

主話では、例えばエイリアンとリプリーを単純に対立させる学生がいるが、この場合にアッシュがどの基本構成素に分類すべきかを考えるならば、適切でないことがわかる。対立は、むしろ前話全体を引き継ぎ、会社の特別指令を実行しようとするアッシュとリプリーに典型的に現れている。

この場合には、エイリアンはいわば会社-アッシュとの系列で、いわば特別指令の非人間性を純粋な形で表現した、いわば象徴的存在として理解することができる。

- I: 特別指令を受けたアッシュのエイリアンを持ち帰ろうとする意志（によって代表される会社の破壊性・非人間性）
  - － 船内にエイリアンを入れるアッシュ
  - － 信号解読作業を怠るアッシュ
  - － エイリアンに関する情報を秘匿するアッシュ
  - － 特別指令を明らかにしないアッシュ
  - － エイリアンの完全・純粋生物としての機械的な破壊性・非人間性
    - \* エイリアンの機械的な姿（これは、猫の動物的な姿と対立し、リプリーとの両者の関係にも反映される。）
    - \* 吸血性（人間の血を吸って、巨大化する。）
- II: 航行の安全を守ろうとするリプリーの意志（に代表される人間性）
  - － 安全規則を遵守し、ケイン・ダラス・ランバートを24時間船外に待機させようとするリプリー
  - － アッシュに対する不信・未知の信号解読をするリプリー
  - － ランバートをエイリアンから守ろうとするパーカーの犠牲的な死
- III: エイリアンとの戦いによる絶望的な結果（乗組員の全滅・地球帰還の可能性の消失・会社の存続）/ エイリアンとの戦いの見せかけの勝利・破壊的意志（会社）の存続
- X:
  - － 猫の構成素的機能  
猫の動物性と人間に対する親近性は、エイリアンの機械的な冷血性に対立する。エイリアンは人間の血液を吸収する。アッシュがロボットであることも重要。会社は特別指令（自らの意志）を機械によって遂行させようとしている。



－ リプリーの勝利はエイリアンからの解放を意味するか？

構成素分析を実践する場合に、モチーフあるいはモチーフ連鎖に注目すべきである。例えば、「エイリアン」の場合には、次のようなモチーフが注目される。

● 猫のモチーフ

これは明らかにエイリアンそのものとは対立し、人間に対する親近性、あるいはその形態の動物的・有機的特徴に対してエイリアンの機械的・無機質的特徴が対立する。

リプリーが母船脱出を試みる最終場面では、籠の中に入れられた猫とエイリアンのアップがこの対立性を強調している。

猫のエイリアンに対する恐怖。

● 血のモチーフ

血のモチーフは、まずエイリアンが人間の血を残らず吸い尽くすという、プレットの死についてのパーカーの発言。

リプリーとアッシュの闘争シーンで、アッシュの頭から流れる白い血とリプリーが鼻から流す赤い血の対立性。アッシュの血は同時にまた、冒頭シーンでエイリアンの幼虫の足から流れ出る強酸性の血液と同様に、非人間的特徴を示す。

● コンピュータとそれに制御された人間のモチーフ

冒頭の母船内の複雑な機器、コンピュータ制御による人間の睡眠、あるいはコンピュータが目覚め、作動し始めて始めて人間の目覚めがもたらされる、など人間の生存状況が機械的に制御されている事態は、そのまま基本構成素I「I: 特別指令を受けたアッシュのエイリアンを持ち帰ろうとする意志(によって代表される会社の破壊性・非人間性)」に分類することができる。

エイリアン、アッシュの秘密を探ろうとするリプリーに対して、あるいは船長ダラスがエイリアンに対する処置方法を尋ねるときのコンピュータの「回答不能」「必要なし」などの答え方に見られる機械的反応。

アッシュがロボットであるという点にもっとも注目しなければならない。構成素Iは、全体として人間の生きている状況全体が、その細部にいたるまで、完全に機械的に制御されていることを定式化すべきである。しかし、この機械的制御は、何か無意志的な性質のものではなく、明らかに地球の「本社」という企業組織の意志を表す特殊体に他ならない。

#### 4.3 構成素構造式の定立

これまでの考察から、映画「エイリアン」の構成素構造式は次のように定式化することができる。

- AK + I: 人間を機械的に制御しようとする企業組織の破壊性・生存への隠された意志。(非有機的意志)
- PK + O: 人間性を守り、非人間的・機械的な企業組織の破壊への意志に対決する人間的意志。(有機的意志)
- RK: 隠蔽された意志の暴露とこれとの闘争、およびその結果としての不十分な勝利。

(講義終了)